

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494

## ● 100万人参観者運動を

'83年7月来館者数	3,028名
通算1ヵ月平均来館者数	4,252名
当月1日平均来館者数	112名
通算来館者数	365,714名

### ビキニの水着と水爆と

服部学

暑い夏になりました。海岸はビキニの水着姿のお嬢さんたちであふれています。ところであの男性の目を楽しませてくれるセパレツの水着をなぜビキニと呼ぶのか、ご存じない方が多いようです。実はあれも原爆実験に由来するものなのです。といっても、第五福竜丸が死の灰をあびた一九五四年三月の水爆実験ではありません。

ビキニ環礁では数多くの核爆発実験が行なわれました。最初は一九四六年七月のクロスロード作戦です。アメリカは第二次世界大戦後初めての原爆実験をビキニ環礁で行ないました。これは軍艦にたいする原爆攻撃の効果を実験するのと同時に、記者に参観を許して原爆の威力を誇示しようとするものでした。実験に参加した医学者ブラッドレーの書いた「隠るべき所なし」という本はたいへんな評判になりました。

この実験を目のあたりに見た人たちはものすごいショックを受けました。たしかその翌年だったと思いますが、女の人の大胆なセパレツの水着が出てきたとき、みんながショックを受けたのでビキニという名前がつけられました。あるいは隠すべき所なしという意味が含まれていたのかもしれない。

ところでビキニ環礁では、この一九四六年のクロスロード作戦で二回、一九五四年のキャッスル作戦で五回(その第一回が第五福竜丸被爆のブラボー爆発です)、一九五六年のレッドウィング作戦で六回、一九五八年の第一次ヘッドタック作戦で一〇回、合計二三回の核爆発実験が行なわれました。また近くの同じマーシャル諸島にあるエニウエトク環礁でも、三五回の核爆発実験が行なわれました。

アメリカは、地下実験も含めてこれまでに約一〇〇〇回の核爆発を行ないました。そのうち比較的威力の小さいものは国内のネバダ核爆発実験場で行なったのですが、大型のものは太平洋の島々を使ったのです。

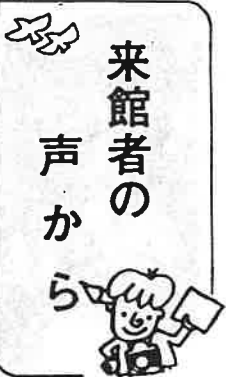
平和に暮らしていた人びとから、生活の根拠である島と海をうばい一部の島を地上から完全に消してしまっただけでなく、残った島も人の住めない放射能の汚染地域にしてしまったなどというのは、ほんとうに許せないことだと思います。

ビキニの水着を眺めるときにはそのことも思い出してほしいのです。

(立教大学・第五福竜丸平和協会 評議員)



## 来館者の声から



入場無料で展示がほうふでビデオを見れるとしても勉強になって良かったです。船の中へ入ることができないのが残念です。 島田

昨年六月、第二回国連軍縮特別総会に出席し広島・長崎のほか、東京にも被曝した第五福竜丸を展示していることを同じ参加者から聞き見学の約束をしたが、一年後の今日その約束を果たすことができた。話には聞いていたが、来る方法を良く知らなかったため何となく広島の方には足がむくが、今まで来れなかった。見学して、何も関係がない久保山さん達が被曝し、そのあとも平気で原水爆実験を続けている国々に、いきどおりを感じた。ただ感じるだけでではなくそれを阻止する行動を今以上に発展させていくと同時に、もっと多くの人に、この館に見学に来ることを宣伝していかなければならないと思った。青森県 木村純子

私はこの第五福竜丸を見に来てよかったと思った。やけどをして、まっくらになっていた人たちを見て、すごくかわいそうだと思った。今はすごく平和でいいと思う。むかしの人たちはとてもかわいそうだったなあとはつくづく思った。戦争なんかやらなければこんなことにならないですんだのに……とも思いました。 唐笠由佳子

ど、だからひとつだけ、今思うことは、にんげんをかえせをみて変わり広島へ行って変わった私。またこの展示館へ来て、変わっただらうなということです。目をそむけて通る人間にはなりたくないから、これからは。 学芸大学生協 高島規子

思ったより近くに原水爆の現状を知ることができるとは驚いた。日本だけがとを知って驚いた。日本だけがとよく言われていることだが、島の住民の人などにも大きな被害がでていることを忘れてはならないと思った。また、署名にしても保存運動にしても、たとえば魚屋さんや町のペンキ屋さんなど、決して「エイイ人」が始めるのではなく、草の根運動から発していることも再認識しこれからの自分達の活動が決して無力でなく、また大切なことであると感じた。教師になった時、父親になったとき、生徒を子どもを連れてきたとき、思う。 学芸大学生協 AISO

もうこのようなことはしてほしくない。平和をぬすむようなことはしないで下さい。

もうこのようなことはしてほしくない。平和をぬすむようなことはしないで下さい。

## 編集後記

▼長かった梅雨が明け、青い空がまぶしい八月がやってきた。夏休みを迎えた子どもたちが、水を求めて夢の島にあるプールにやってくる。展示館も午前中から子どもで賑やかになる。小さな子どもよりも元気がいい高校生が七、八人グループをつくってぞろぞろと訪れる。それぞれ思い思いの華やかな私服を身につけ、おしゃべりし、制服から解放された自由気ままな高校生の姿がある。彼らは先生から手渡された課題ノートをしっかりと手に持ち、展示物を見ながら、空白の場所を埋めていく。十一月に広島へ行くという埼玉の上尾南高校の生徒たち。彼らの旅はもう始まっている。

▼八三年原水禁世界大会を前にして、江東原水協、都民生協などの団体の見学が相次ぐ。船が病んでいるニュースを新聞の報道で知った見学者は今までと違った目で福竜丸を見つめる。

へお詫び〜63号のたよりの一面に校正ミスがあったことをお詫びします。3行目の被曝は被爆、14行目の判断は判決の誤まりです。(も)

### いよいよ船体補修工事開始

## 応急修理から本格工事へ

前号以来、第五福竜丸がピンチと修理をよびかけていたが、関係者の努力が実り、七月末から東京都による補修工事が始まった。工事の中心は、船首のダレの防止と支柱の補強工事。自重と支柱の不備で龍骨が曲り、外板もたてにひびわれが入り、まさに「大地震でもあればくずれ落ちる寸前」の船首を鉄棒でがっちり固め支えようというもの。専門家の意見を参考にしながら文字通り緊急工事としておこなわれ、この工事のあと様子を見ながら、内部に心棒をいれたり、木枠で船の外板を固めたり、防腐剤の注入など応急の修理がひきつづきすすめられる予定。

工事の担当者も、七年前の展示館建設のさい、最も困難だった船の陸揚げと移動を担当した「落合組」のみなさん。芝・増上寺の山門の解体と修理も行なったという

重要建築物、文化財の修理の専門業者。

七月二十三日、都の関係者とともに工事の日程、工法など打ち合わせにきた社長の落合巖さんは第五福竜丸移動の時の責任者。「あの時も、はれ物にさわるようにそろそろと動かした。一日三〇センチ動かせばいい方だった。今回はもっと大変、保存のために力を尽された人々のことを思い、慎重に、しっかりした工事をした」と語っている。

工事は様子を見ながらのため長期にわたる予定で、その財政保証も緊急工事は都の臨時支出を中心に行ない、本格工事は正式に予算をくんで検討することになった。平和協会のみなさんからの激励、見学、募金も心待ちである。

### テレビでも紹介

船の応急修理の報道は、朝日新聞(7・23)、赤旗(7・22)等で行なわれ、八月二日にはNHK・フジテレビ等でとりあげられた。

## 評議員19氏を選出

### 第55回理事会ひらく

七月二〇日、東京の学士会館で第55回理事会がひらかれ、83年原水爆禁止世界大会への参加をはじめとする当面の活動計画、資料室建設、船体の本格的修理計画などを討議、規定にもつき、評議員の改選をおこない、十九名の方々に会長名による委嘱をおこなった。氏名は次のとおり。

- 秋月辰一郎、伊東壯、石井あや子、内山尚三、小笠原英三郎、小川岩雄、小野周、川崎昭一郎、草野信男、庄野直美、関屋綾子、服部学、福島要一、森滝市郎、山口勇子、吉田嘉清、三井周二、畑敏雄、山内新二郎。

(敬称略・順不同)

### 船は豆腐のよう

専門家の意見から(抜粋)

竹鼻三雄さん(東大・船舶力学) 個々の部材は木材としての強さをほとんど失っておりこれを固着するボルトも錆のため瘦せ細ってその用をなしていないが、いわゆる「相持ち」の原則によって辛うじて船形を保っているものである。もし不用意に一部の部材を修理のため取外したとすれば、各部材のバランスが崩れ全体が崩壊しかねない状態にあるものと考えられる。船体の支持箇所を三〜五箇所増すと共に支えの場所は船底だけでなくクレードルにより横断面を広い幅で支えなければならぬ。船首に鋼鉄製のクレードル(馬)をはめこれを下からジャッキで支え少しずつ持ち上げる。キールのみ押しあげても無効である。

小佐田哲男さん(東大・船舶技術史) 声を大にしていいたいことは現在の第五福竜丸はもはや木造船ではなくて、まさに豆腐であるということだ。すなわち現在辛うじて船の形を保っている本船になるだ

け外力を加えないように、あたかも豆腐を掬いあげるようにそっと抱きあげて保存の策を講ずるを要するということが至難の条件となりましよう。いまひとつの難題は地盤の件であり施工に伴うほんの些細な衝撃も本船瓦解の引き金となる危険性を孕んでいる。現在の支持台を船首尾各一、船体中央部四の計六カ所に補外しそこに外肋骨を新設して船体を外側から抱えたい。

岩崎友吉さん(国立文化財研究所名譽研究員) 船体とくに船首船尾に留意して全体を籠のような構造の鉄材で抱くように支えることが有効と思われる。この際船首船尾は幾分上向き力を加え多少なりとも変形の復元を期したい。上方に吊り上げるといふ考え方もあるが、これは脆弱化した甲板を破壊するおそれもあり、また何らかのかたちで建物の一部と固定的に連絡することは地震等の場合にも危険である。内部に強力な構造材をとりつけることが望ましい。内外は清掃を除いて化粧直しの処置は好ましくない。防腐剤の塗布その他はこの限りではない。

## 死の灰から三〇年

マーシャルの被ばく者たちはいま—その2 写真・文 桐生広人



ロンゲラップ島から脱出した被ばく者たち。"死の灰"で汚染された島を逃れても、放射線の魔手からは誰も逃れることはできない。

第五福竜丸とともに死の灰を浴びたロンゲラップの人たちに会うため、クエジエリン環礁イバイ島に渡った。この島には死の灰を浴びた人たちの半数ちかくが住んで

いた。ロンゲラップ島は今だ残留放射能で汚染されているにもかかわらず、米国がもう安全だとして島での居住を許している。しかしせられた人たちはその危険性を察知してイバイ島に脱出してきたのである。私は被ばく者一人一人に現在の健康状態を尋ねてみた。何ともない、と答えたのはたった一人だけ。ほとんどの被ばく者は、高齢化とともに足腰の痛み、体のかゆみ、視力低下、易疲労感、糖尿、ガンなどに侵され

不安な毎日だと訴えた。婦人たちは、今日までの間に信じられないほどの死産・流産を繰り返したという。たとえ無事に生まれたとしても、奇形児や虚弱児であったり、小頭症、甲状腺ガン、精神障害などを待つ障害児が続出しているという。あれから三〇年もたっているというのに、信じられないほどの悲惨と深刻さがこの島には充滿していた。

案内をしてくれたネルソン・アンジェインの兄、ジョン・アンジェインは四人の子供のうちレコジを白血病で失い、他の二人は甲状腺を侵されて手術を受けた。

ジョンは何度も米国に行き、米政府や国連に被ばく者の救済を訴えてきた。その成果があつてか、今年の三月、米国との間で調印した自由連合協定の中で、核被害の「責任は米政府にある」と認めさせ、賠償基金の拠出に応じさせることができた。しかし、この措置はマーシャル諸島を米国の核軍事基地として使用するための、自由連合協定を国民投票で承認させる手段でもあり、決して人道的見地からとられたものでないということとは、誰の目にも明らかである。